

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成30年6月5日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02567

研究課題名(和文) 子どもの言語社会化：感情、社会的行為とアイデンティティ

研究課題名(英文) Children's language socialization: Emotion, social action, identity

研究代表者

バーデルスキー マシュー (BURDELSKI, MATTHEW)

大阪大学・文学研究科・教授

研究者番号：80625020

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は子どもの過去の経験に関する自己物語(ナラティブ)から、親と過去の出来事について、いかに協働で物語を構築するのかに着目した。30時間の録音・録画したデータに基づいて、分析を進めていった。物語の中で子どもが語彙、文法、オノマトペ等の言語資源および表情やジェスチャーといった非言語行動を使用し、自身の言動を再現することが見られた。そして、自身だけではなく、他者(人物、動物)の言動を再現することも見られた。この結果から、親と一緒に過去の経験を語ることを通して、自身の記憶を相手に適確に伝える伝達能力、感情の育成、アイデンティティの構築といった社会化に不可欠な要素を育てる機能があることが示唆される。

研究成果の概要(英文)：This study examined two-year old Japanese children's interactions with parents in households. Based on 30 hours of audiovisual recordings, the analysis focused on storytelling of children's personal experience. It finds that children used a range of linguistic and embodied resources, such as lexicon, onomatopoeia, gestures, and facial expressions, to co-tell with parents their experiences. Within these stories children took on various speaker roles, such as author of their own actions and words and animator of the actions of others. The findings of this study shed light on everyday storytelling as an important site of language socialization by showing ways in which the process of language acquisition and cultural acquisition are interlinked and inseparable.

研究分野：日本語学

キーワード：社会化 子ども アイデンティティ 会話 自己物語 ナラティブ 言語社会化 感情

1. 研究開始当初の背景

(1) 子どものコミュニケーション能力の発達に関する研究において、生まれてから3~4年という限られた期間に語彙・文法習得といった劇的な言語発達の変化がみられることは、発達心理学の分野を中心として数多く報告されている。しかし、この変化が起る以前に、子どもが他者と相互行為を行っている場面や社会活動において何が起きているのかを明らかにしようとする研究はまだ数少ない (Takada, 2014; 高木, 2011 など)。心理学及び教育学をはじめ様々な分野において重要視されてきた経験的研究は、大人や兄弟などのエキスパートによる社会化ストラテジー (質問、指示、引用表現、評価など) やマルチモーダル資源 (音声、語彙、身体配置、表情、ジェスチャーなど) を使用して挨拶、謝罪表現、お辞儀といった日常の社会行動を子供に学ばせる方法に焦点をあててきた。さらに、社会的行為・規範や思いやり、責任、道徳性、ポライトネス (丁寧さ)、アイデンティティ (ジェンダー、上下関係など) などといった文化的要素をどのように伝えるのか、そのプロセスの解明にも貢献してきた。本研究は、言語人類学的アプローチに基づき、幼児 (1歳から小学校就学まで) が参加する相互行為 (日常会話) における活動に焦点を当てる。

(2) 着眼点は、子どもの日常生活における「言語社会化」(Duranti, Ochs & Schieffelin 2012; Schieffelin & Ochs, 1986 など) のプロセスである。言語社会化論は言語人類学的なアプローチであり、幼児、成人を含む新参者が社会・教育機関、組織活動などに適切に参加できるようになるまでの過程を明らかにすることを目的としている。そのアプローチは、言語能力や文化知識などが比較的高い者というエキスパート (祖父母、親、兄弟など) とそれらが比較的低い者というノヴィス (乳児・幼児、学生など) の相互行為に焦点を当てる。Schieffelin & Ochs (1986, p. 163) は、言語社会化のプロセスは「(エキスパートが) 言語使用を通して社会化を実現させること」と「(ノヴィスが) 当該社会や場面に応じた (非言語行動も含めて) 言語を適切に使用すること」という2つの点があることを主張している。すなわち、幼児などのノヴィスは、エキスパートとの相互行為によって、日常会話や組織活動における言語を適切に使用できるようになると同時に、社会的行為・規範や文化的要素 (思いやり、ポライトネス、アイデンティティ) も身につけるのである。本研究では、普段のエキスパートとノヴィスの相互行為に最もよく観察される活動の1つである自己物語 (ナラティブ) を取り上げる。

2. 研究の目的

子どもは、一般的に、生まれてから3~4年

の間に他者とコミュニケーションを行う能力の基盤を習得する。そして言語を習得すると同時に、社会的行為・規範・思いやり・責任・道徳性・ポライトネス (丁寧さ)・アイデンティティなどといった文化的要素も身につける。つまり、相互行為への参加が言語・文化習得に先立って可能となっているのである。本研究の目的は、この言語・文化習得といった「言語社会化」のプロセスにある相互行為 (親子、子ども同士などの会話) に参加することがいかに可能となり、実現されているのかを、実際の相互行為場面や社会活動 (食事、遊び、本読み聞かせなど) を観察・記録し、収録したデータから分析を通して明らかにすることである。

3. 研究の方法

本研究では、言語人類学的アプローチとしての言語社会化の方法を取り上げる。その方法とは、子ども (ノヴィス) と親や兄弟 (エキスパート) の日常的相互行為場面や社会活動 (食事、遊びなど) に焦点を当て、それがいかに参加者によって組織化されているかを検証することである。そのために、自然なやり取りを観察・記録し、収録したデータを文字化する。文字化をするにあたって、言語行動だけではなく、ジェスチャー、視線、身体位置などといったマルチモーダル資源も詳細に記述していく。そして、様々な場面や社会活動を通して、繰り返し使用される実践を記録し、量的・質的観点から分析を行う。分析のカテゴリーは言語社会化ストラテジー (質問、指示、代弁、評価など) や言語・非言語的資源で、それに加えてそれぞれの場面や活動及び子どもの年齢や性差によってどのように言語使用が異なるのかも探ってみる。

4. 研究成果

言語社会化の過程において、子どもが自分の経験を遡って語るということは重要な実践である。その実践は、リテラシー能力の発達やコミュニケーション能力の育成、規範の習得、道徳性の発達に繋がると言われている。語りの中で、子どもがどのように「話し手」になるのかという課題が挙げられている (Ochs, 2002)。このことに関して、米国の社会学者 Goffman (1981) はフットイング論の中で発話に関する「産出フォーマット」を提唱し、ある発話に対して、話し手は「発声者」(言葉を産出する・声を出して発音する者)、「作者」(その言葉を作成した行為者)、「主体」(その言葉の内容を確認し、信条をもっている者) という3つの役割を細分化している。通常、現在の話者はそれら3つの役割が合わさった共同体であるが、その役割は分裂

する場合がある。例えば、メディアにおいて、通常テレビのニュースキャスターや通訳者は主に発声体であるが、作者と主体ではないとみなされる。さらに日常会話においても、C. Goodwin (2006) は、現在の話者が他人の言葉を引用する時に、現在の話者は発声者で、言葉を引用された者は主に作者と主体であると考えている。本研究では「産出フォーマット」の枠組みを援用し、子どもが親や兄姉との相互行為の中でどのように「話し手」の役割を位置づけたり位置づけられたりするのかを明確にする。

以上の理論に従って、2歳児が親と一緒にどのように過去の経験を語るのかに着目し、その中で子どもがどのように「作者(author)」と「発声者(animator)」(Goffman, 1981)という2つの「発話者」の役割を位置づけたり位置づけられたりし、親と一緒に語るのかという観点から行った分析の結果を次の2点に分けて報告する。

(1) 作者としての言語・非言語使用

まず、過去の経験に関する物語の中で子どもが「作者」として、自分の言動を再現し、それを通して何をどのようにしたかということを見せる「show」(Lerner, Zimmerman & Kidwell, 2011)ことが明らかになった。例えば、事例1は、父と一緒にスイミングスクールから帰宅したところで、食卓に座って昼ごはんを食べ始めた子ども(男児、名前：シュウ、2歳5ヶ月)が母と話している場面である。この断片の直前、母はすでに答えを知っている「シュウちゃん、今日何したの?」と質問し、子どもから返事がないことに対して「プールに行ったの」と子どもの代わりに答え、1行目でさらに物語を追求する。

事例1 「スイミングスクール」

01 母 今日プールで：(1.9) |ゴ：：：：：シゴ：：シした。
 02 男児 |((両手を持ち上げ動かす 図1-a))
 03 プール/ゴシゴシしてた。
 04 母 プールした。
 05 男児 ((右手で上を指差す 図1-b))
 06 |こっちこっちこっち泳い(0.3)|泳いだ。
 07 |((手を左右に4回動かす) |
 08 (0.4)
 09 母 あ：そう：：。|こっちこっち泳いだ。
 10 |((2回指差す))
 11 父 h h h
 12 母 ん：： [|どうやって-] どうやって泳いだ
 13 |((シュウの方へ少し傾ける))
 14 男児 [()]
 15 |こっちこっちこっち。 |
 16 |((数回指差す 図1-c)) |
 17 母 本当。
 18 ((物語が続く))

事例1では、子どもが当日の朝スイミングスクールに行った経験に基づいた物語において言語とジェスチャーを使用することが見られる。まず、母が産出した発話の冒頭とその直後に生まれた間合い(01行目「今日プールで：(1.9)」)に対して、子どもが両手を持ち上げ動かす(2行目、図1-aを参照)。この身体的行動は、母の発話の続き(「ゴ：：：：：シゴ：：シした」と重複し、立

ち泳ぎしたようにプールで泳いだ(幼児語である「ゴシゴシ」という「描写的ジェスチャー(iconic gesture)」(McNeill, 1992)を示している。要するに、子どもはジェスチャーをすることで、過去の出来事を報告するだけではなく、その出来事に自分がどのように参加したかを見せることができる。続いて、子どもはさらにどのように泳いだかを言語と非言語行動を使用する。特に、母の「プールをした」という断言に対して、右手で上を指差した(05行目、図2を参照)。その直後に、手を左右に4回動かしながら「こっちこっちこっち泳い(0.3)泳いだ」と言い、物語を展開していく。このジェスチャーは先ほどの立ち泳ぎを見せるジェスチャーと異なり、手と腕を4回地面に並行し動かしてプールで往復したように泳いだことを見せる。さらに、子どもは母の「どうやって泳いだ」という子どもの再現を促す質問に対して、もう一度「こっちこっちこっち」と言いながら、さらに母の目の前で同じようなジェスチャーを何回も繰り返す(図1-cを参照)。以上のように2歳児が「作者」として、自分の経験を言動で再現し、何をどのようにしたかということを見せ、親と一緒に過去の経験に関する物語を語っていく。

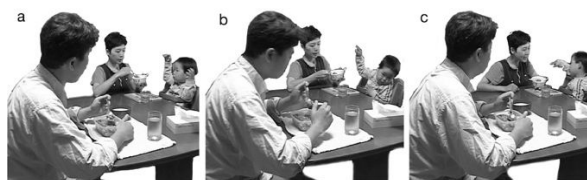


図1

(2) 作者及び発声者としての言語・非言語使用

次に、過去の経験に関する物語の中で2歳の子どもの「作者」だけではなく「発声者」として第三者(人物や動物など)の言動を再現することも見られた。事例2では、母が夕食の準備をしている間に、子ども(女児、1歳11ヶ月)が食卓に座り、山羊の絵が書いてある自分の前掛けを持っている。この断片の前に子どもが前掛けを見て、「山羊ちゃん」と歌を歌うような調子で何度も繰り返して言う。それに対して、母が「エプロンできるかな」、「1人でできるかな」などと子どもに自分で前掛けをかけるように促す。その後、子どもが思いがけなく山羊の代わりに羊を言い始め、母は「山羊だしよ」と訂正し、山羊に関する過去の共有経験(家族で3ヶ月前に牧場に行ったこと)を子どもに思い出させようとする。

事例2 「やぎさん」

- 01 母 この間いたでしょ? おやぎさん。
 02 (1.4)
 03 女兒 やぎちゃん怖い:::。
 04 母 そう。↑怖い:: ↓って言ってたね。
 05 (1.2)
 06 女兒 やぎちゃん怖い。
 07 (0.5)
 08 母 怖くないのにな::。
 09 ↑怖い:: ↓って言ってたね。
 10 女兒 やぎちゃん人參貸して。
 11 |((両手を前に出す 図2))
 12 母 そう。>人參ちょうだい、人參ちょうだい
 13 ってやぎさん来てたね。
 14 (1.3)
 15 すごいっばいやぎさん来てたね。
 16 ((物語が続く))

事例2では、母が促した山羊の思い出について、子どもが自分の前掛けを見ながら「やぎちゃん怖い:::」(3行目)と評価する。これはあくまでも子どもが自分の前掛けに書いてある山羊に対する評価ではなく、過去に出会った山羊に対する評価であり、母と一緒に語ることで、物語を共同構築することに大きな貢献をしている。この評価では子どもが「怖い」という形容詞の最後に母音を伸ばすことによって、自分の情動的スタンス(Cook, 2014)を示している。ようするに、子どもが物語における作者として過去の記憶にある気持ちを再現している。これに対して、母が「↑怖い:: ↓って言ってたね::」(04行目)と子どもの評価に引用マーカーである「って言ってた」を付けて評価を繰り返し、子どもがその評価の作者として確認する。続いて、母が子どもの山羊が怖いことを否定した(8行目)後に、子どもが両手を前に出しながら(図2を参照)「やぎちゃん人參貸して」(10行目)と山羊の行動を擬人化して声を代弁する。この代弁は、母は「人參ちょうだい」と言い換えて、山羊が食べ物(人參)を依頼しにやってきたという理解を示しているものである。



図2

以上のように、子どもが親と一緒に過去の経験を語ることを通して、子供が感情、アイデ

ンティティ、記憶(心理学では思い出にある「エピソード記憶」)などを表出し、社会化されていくことが示唆されている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

(1) Burdelski, M. Reported speech as cultural gloss and directive: Socializing norms of speaking and acting in Japanese caregiver-child triadic interaction. *Text & Talk*, 35(5), 575, 査読有
DOI:10.1515/text-1015-0017

〔学会発表〕(計6件)

Burdelski, M. (2018年3月26日) Symbolic competence and epistemics: Literacy activities in a Japanese as a heritage language preschool classroom. American Association for Applied Linguistics (AAAL), Chicago, USA. 国際学会

Morita, E. & Burdelski, M. (2017年7月17日). Two-year olds' storytelling in dyadic and triadic interaction. 15th International Pragmatics Association (IPrA) Conference. Belfast, Ireland, UK. 国際学会

Burdelski, M. (2017年3月19日). Mediating (potential) conflict situations in preschool: Children's use of reported speech in Japanese. American Association for Applied Linguistics (AAAL), Portland, USA. 国際学会

Burdelski, M. (2016年11月30日). Socializing children's bodies. Australasian Institute for Ethnomethodology and Conversation Analysis (AIEMCA), Melbourne, Australia. 国際学会 招待発表

Burdelski, M. (2015年7月27日). Interactional routines, explicit instruction, and affective stance in child-child interactions in Japanese. 14th International Pragmatics Association (IPrA), Antwerp, Belgium. 国際学会

Burdelski, M. (2015年5月21日). Repairing children's words in a Japanese as a heritage language classroom. Word Up Conference: Critical approaches to lexis in multilingual settings, Lake Arrowhead, California, USA. 国際学会

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/~mburdel/>

6. 研究組織

(1)研究代表者

バーデルスキー・マシュー (BURDELSKI
MATTHEW)

大阪大学・文学研究科・教授

研究者番号：80625020

(2)研究分担者

高田 明 (TAKADA AKIRA)

京都大学・アジア・アフリカ地域研究研究
科・准教授

研究者番号：70378826

(3)研究協力者

遠藤智子 (ENDO TOMOKO)

成蹊大学

研究者番号：40724422